藤波こども園

園だより　№８０　令和４年３月１７日

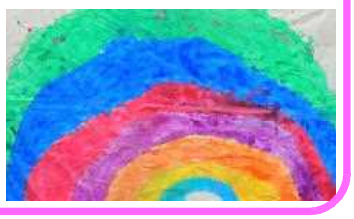
旧 藤波幼稚園
現 藤波こども園
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ www.fujinami-ci.sakura.ne.jp/　（藤波こども園で検索可）
（tel 0740-32-0329）

巣立ち

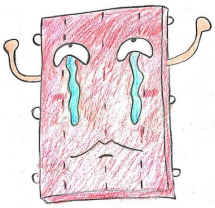
園に来て鳥の声を身近に感じることが多くなった。４月５月はヒバリのさえずりが、毎日聞ける。６月７月はヨシキリの声がかまびすしい。夏の訪れを告げる。４年も前のことだが、園でカラスとセキレイが巣立った。ツバメの巣は途中で何者かに襲われていつの間にかいなくなってしまった。周囲の田んぼの草陰にはカルガモの卵も見られる。散歩に行った子どもたちが見つけてくることもある。冬にはオオバンがやってきて園横の川の藻をほとんど食べ尽くしていた。他にもモズやムクドリ、鮮やかな色調のキジ、スズメ、ハト多くの野鳥が子どもたちの周囲には生活している。チコちゃんじゃないが、ボーと生きているとその事に気づかない。ヒバリやヨシキリは特によく啼くが、その鳥の姿はほとんど見かけない。それこそ真剣に探さないといけないのだが、大人達はそれどころではない。「今日はやけにヨシキリがよく啼くなあ」と言ってもほとんどの先生達は？？？である。一度興味を持ったりすれば耳に止まるようになるのだが、自然と共に生きていることを感じながら過ごしていられることに感謝である。

６月、乳児（0・1・2 歳児）棟の裏口バスの車庫近くを歩くとセキレイが二羽頭上を舞いながら絡みつくように舞ったり、目の前の手の届きそうな近くのフェンスに止まったりして遊んでくれる。今までそんなことがなかったのに急につきまとうのでぴんと来た。「わかってるって」「君らの子どもが居るんやろ」と話しかけながら用事を済ます。巣のあるだろうと思われる場所から２０メートルくらい離れてもまだついてくる。あまりに見え見えの親鳥の行動に何か嬉しくついかまいたくなる。その何日か後、まだ羽ばたきの弱い少し飛んでは休憩する子どもとおぼしきセキレイが数羽賑やかに遊んでいた。２歳児達はひな鳥たちの姿を求めてあちこちブロックの隙間や屋根のひさしあたりをきょろきょろとのぞき込んでいた。ほんの一瞬だが小さな命が園の皆を自然の営みの中に導いてくれたと喜んだ。

卒業に当たって巣立ちという言葉が使われる。だが、自然界において巣立ちは、弱肉強食の世界に飛び込むことを意味する。卒園する子どもたちにとって小学校は本当に新たな世界だ。その中で子どもたちが課題に直面した時にどう対処するかが一番の見所だ。自然界と異なるところは人間の社会性だ。仲間と共同し、互いを尊重し、課題に向かう。そのことで、自分ひとりでない安心感を得、信頼を築き上げていく。相手を思いやり譲り合う気持ちが相手の心を和らげる。時には対立する両者の橋渡しをすることもある。そうした経験を今、日々子どもたちは先生たちの後押しをもらいながら積み重ねていってくれている。技能の習得ではない。人と人がつながる場(空間)を作るのだ。それが喜びにつながる。そうしたことの繰り返しを積んでいけば人の痛みもありがたみもわかる。人の社会が弱肉強食であってはならない。皆を包み込んでいける社会、世界でありたい。卒園する子どもたちが園での学びをもとにさらに発展させよりよい世界の実現に寄与してくれることを願う。よい戦争なんてない。戦争は悪だ。



子どもあれこれ



年長児の挑戦

３学期、年長児は卒園そして小学校への気持ちの積み上げに忙しい。この時期年長児たちは心が落ち着かない。なんといっても卒園である。気楽に慣れ親しんだ先生や仲間たちとお別れしなければならない。さらには、全く新しい世界、小学校へと向かうのである。教科の学習という全く新しいことにチャレンジしていかなければならない。

３月になって元気もんの年長児に「小学校行っても大丈夫？」と話しかけると、「はい（ほい）！」と背筋を伸ばして威勢良く返事し、行進？し始める。自分は大丈夫『ほら！見ての通り』といったところなのだろう。毎年の様に同じ光景が見られる。緊張と期待と成長したことを認めてもらおうとする心の表れかと思う。去って行く子の後ろ姿を見送るのは淋しいが目を輝かせて前に進む姿を想像し笑顔で送りたい。

年長児の試練

園にあるジャンボカルタ（先生製作）で年中の子どもたちが毎日練習していた。ある時ホームで年中と年長で対戦しようと話が持ち上がった。やってみると一方的に年中の方が勝った。何度もやるが、年長は勝てない。年長のこの中には怒り出す子も。しかし怒りの矛先を向ける場所がない。泣き出さんばかりだ。

３月になって年長が先生とドッジボールで対戦した。はじめは先生が手加減していたこともあって子どもたちの勝利が続く。しかし、ある時先生の数が足りず、先輩先生をかり出しに言った。その勝負について余り事情を知らないその先生は、外野に行って子どもたちを当てまくり、先生の大勝利。ところが、おさまらないのは子どもたち。何と言っても外野の先生は当てたら中に戻るというルールを無視し、外野から当て続けたからだ。担任の先生たちは必死になっている先輩先生を見て笑っていたが、忠告はしなかった。次の日子どもから「ずる先生」と呼ばれた先輩先生。でも子どもたちはその次の日には普通に戻っていた。「負ける」という大きな試練を与えてもらいました。

ニコニコ・コーチと失意のコーチ

「♡大好き～♡」この一年間何回も指導に来てくれた運動遊びのコーチ。子どもたちを毎回笑顔にしてくれていた。そんな子どもたちはコーチのことが大好き。今日も運動遊びの終わりがけにコーチとタッチをして笑顔いっぱいで去って行った。コーチは一年間同じであったＡコーチ、ところが今日はもう１人少し若手のＭコーチが帯同していた。２人のコーチの横を通り過ぎ帰って行く時、ある子がコーチに向かって「Ｍコーチだ～い好き」と何回も言いながら帰って行った。今回初めての指導であるＭコーチはニコニコ。その横で、一年間がんばってきたＡコーチは今まで築いてきたその子との関係が一瞬にして崩れ去っていく様な思いにとらわれてしまい、大きなため息が。わかります。その気持ち。でも「２歳児の言うことなんだから」とか「まあ、人には相性というものがあるから」との励ましもその日は効果ありませんでした。もちろん帰りのＡコーチはいつも通りの元気を取り戻していました。というのも、子どものよさは、変に気をつかわず感じたままを素直に表現しているだけだということを十分わかっているからでした。（なんだか淋しくもなりますが‥‥）

ありがとうございます。

【いただきました】

①おりがみ　ポケットティッシュ　ぬりえ等
安曇川民生委員児童委員協議会より
②童話・絵本　**滋賀日産自動車(株)より**
③ジュース　**下小川小島さんより**